

憲法施行60周年記念市民集会 PART II 「戦争の実態から平和憲法について考える」 を開催して— 郡山総一郎氏の講演 —

憲法委員会 委員長 由良 登 信

1 市民集会 PART II の開催

和歌山市弁護士会の主催で、2008年2月15日(金)の午後6時30分から和歌山市内のあいあいセンター6階ホールに於いて、憲法施行60周年記念市民集会 PART II「戦争の実態から平和憲法について考える」を開催しました。150席の会場に約100名の市民のみなさんの参加があり、盛況でした。

この市民集会は、昨年5月11日に開催した憲法施行60周年記念集会「憲法って何やねん! どうすんねん!」に続く PART II として企画しました。

現在、世界で起こっている戦争や紛争の実態をリアルに知ることにより戦争がなぜいけないのかを実感し、憲法の平和主義の意義について考える機会になればと考えて企画したものです。

そこで、集会は、世界の戦争・紛争地域で取材し、写真提供を続けられているフォトジャーナリストの郡山総一郎さんに会場で写真映写をしていただきながらご講演いただくということになりました。

2 こおりやま そういちろう 郡山総一郎氏のプロフィール

郡山さんは、2004年4月にイラクで高遠さん、今井さんと3人で「人質」になったことでマスコミにとり上げられ「時の人」と

なりました。このときに拉致したイラクの人たちが「人質」の郡山さんたちをととても大事に扱ってくれたことなどが、郡山さんの著書「人質 イラク人質事件の嘘と実」(ポプラ社)の中で実録として書かれています。

郡山さんは、1971年宮崎県生まれで、高校卒業後自衛隊に入られてレンジャー隊員の訓練などを数年間された後、突然2001年からフリージャーナリストとして写真取材を開始。同年に「イスラエルの現実」と題した写真で、よみうり写真大賞奨励賞を受賞。タイ・フィリピン・アフガニスタン・イラク・カンボジアなど様々な国の危険な地域へ入り、取材をし、月刊誌、週刊誌などに写真を発表されています。著書には、前述のもののほか「未来って何ですか ぼくがいちばん撮りたかったもの」「戦争の後に来たもの カンボジアが映す時代」(共に新日本出版社)などがあります。

3 郡山総一郎さんの写真映写と講演(要旨)

(1) はじめに

今日は、日本ではあまり取材されていないのですが、今、タイ深南部で行われていることと、カンボジアでの取材にもとづいて「戦争の後に何が生まれ、何が残るのか」という僕のライフテーマについて、僕の撮った写真を見ていただきながらお話しします。

なぜ戦争はいけないのか、という根本的なことと、日本は今、憲法改正とか言われていますが憲法というものが私たち国民にとっていかに必要なものなのか、ということを感じてもらえたらと思っています。

(2) 「戦争・紛争の原点」 — タイ深南部の殺し合いの現場から

タイの深南部。マレーシア国境から100キロ圏内にある地域に、仏教国であるタイの中であって、イスラム教徒が8割ほどを占めるヤラーとかいくつかの町があります。この地域は、この3~4年間ほどの間、イスラム教徒と仏教との対立という図式の中で、殺し合いをやっていて、2004年から現在までに、一般市民、仏教徒もイスラム教徒も合わせて、約3000人が殺されています。

このタイ深南部は、もともと独立した国であったのですが、1800年代にタイが軍事侵攻して吸収(占領)してしまったという歴史を持っています。

この地域をこのような殺し合いの状況にする流れをつくったのは、2年前の9月まで首相であったタクシンという人です。タイの国全体でイスラム教徒は5%ほどしかなく、その少数派のイスラム教徒を押さえ込み、デモなども軍事的に抑圧してきました。そういう中で、たくさんのイスラム教徒が殺され、それに対抗するいろんな武装組織を産み出してしまった、と認識されています。

僕は、6年程前からタイに関わっていますが、昨年7月くらいからこの地域に関わるようになりました。

この地域に来て、はじめに思ったのは、ここはタイらしくない、ということです。タイの町は、新宿の歌舞伎町より安全なのですが、

ここはそういう雰囲気はまったくなく、町中には兵士がいっぱい立っている、検問をしている、夜9時以降は外出禁止令が出され、警察や軍に撃たれても文句を言えない。バイクに爆薬を仕掛けて、人がいる中で爆発させたり、銃を持った人たちが突然教室に入ってきて、先生を撃ち殺すとかのテロと言われるような行為によって攻撃を行っている。まさに、戦時下だなあ、というのが第一印象でした。

当初、仏教のお坊さんが殺されるということもあったので、お坊さんが移動するときは、軍の車に乗って護衛付きで動く。

殺されるのは仏教徒だけではなく、イスラム教徒もよく殺されている。仏教徒の人が殺されると翌日イスラム教徒の人が殺られる。イスラム教徒が殺られると、その翌日には仏教徒が殺られる、という方程式がある。

人の集まるところでよく爆破が起きる。駅前に置かれたバイクに爆薬が仕掛けられていて警察官を含む20人が死傷した。リモートコントロールで爆破させている。こういうことは頻繁に起こる。僕が7月に泊まっていたホテルが爆破されて、バラバラになった肉片を警官が拾っていた。昨年12月31日のカウントダウンイベントの最中にも爆破があって、このときは5人が死傷した。

攻撃対象は無差別で、誰が殺られるかまったくわからない。農作業中に撃たれる、モスクから出てきたところを撃たれる、仕事の帰り道で頭に5発、身体に5発の計10発を撃ち込まれた。そして、尋常ではない殺され方をするケースが多い。恨みとかが入っている殺され方で、殺されて遺体を燃やされたり、首を切られたりということが非常に多い。僕が取材した2ヵ月間に30件以上の事件があった。2日に1回のペースで人が殺されてい

る計算になります。

そして、警察も軍もあてにならないので、普通の人々が銃を持って武装するということが起きている。自分たちで村を守るというセキュリティビレッジが増えていて、そこには国軍から武器、弾薬が流れてきている。

昔は、仏教徒もイスラム教徒も混在して一緒に生活してきたが、今は、お互いに対する感情が悪くなり、不信と恨みがどんどん悪くなってゆく。根っ子は、不信感や恨みから広がってくるのではないかと思う。戦争・紛争の原点が見えます。

日本では、この地域のことは全然注目されていないが、ヨーロッパやアメリカでは非常に注目を受けている。今後も取材を続けていこうと思っています。

(3) カンボジア—戦争の後に何が生まれ、何が残ったのか

ア、地雷

・ 僕は、4年前からカンボジアに関わっています。

ベトナム戦争は、ベトナムだけではなく、カンボジア、ラオスにも影を与えています。また、ポルポト派などと政府との内戦は90年代まで続きました。カンボジアには現在でも600万発の地雷が埋まっていると言われていて、これは世界で3番目に多い数。1番は、イラクとアンゴラで、それぞれ1500万発ずつ、2番目はアフガニスタンで700万発といわれています。世界中に今、8000万発から1億1000万発の地雷が埋まっているが、NGOで年間10万発を撤去しているが、毎年、新しく250万発から500万発が埋められているといわれており、どんどん

増えているのです。地雷は、一度埋めると50年から100年間作動しますし、相手を選びません。

・ カンボジアの中でも、地雷が多いところは、農村・農地で、国境沿いに集中しています。中でも多いのは、バタンバン州で、南西部の国境沿いです。農村には、いたるところに地雷の埋設を示すドクロマークが貼られていて、農民は、ドクロマークに囲まれて生活しています。

水道・電気・ガスもないというのが普通の農村の家庭です。農作業中に農民が地雷の被害遭うことが多く、農作業を難しくしています。それが貧困を一層ひどくしています。

カンボジアの病院には、1ヵ月に30人ほどの地雷の被害者が運ばれてくるということですが、農村部には病院が無く、病院まで車で片道6時間もかかったりするので、病院に行くまでに亡くなったり、病院へ行けない人も多く、それらの人の地雷被害はその数に入っていません。

・ 地雷には、対人地雷と対戦車地雷があり、カンボジアでは1970年代のベトナム戦争前後に埋められたものです。このうち、対人地雷の方がこわい。対戦車地雷だと100キロから150キロの重量がかからないと爆発しないけれど、対人地雷の方は敏感で、3キロから5キロで爆発するので危険です。

その上、対人地雷は、殺傷能力を抑えていて、殺さないで片足や手を失くす程度につくられていて、片足を失くして、十分に働けない人を増やし、その国や地域を経済的にもダメージを与える、ということを経済計算してつくられています。次の世代を担う

子ども達を狙った地雷もあります。

- ・ カンボジアでは片足がなく、ツエをついで歩いている人が多い。義足は貧しいため買えません。

遊んでいるときに地雷を踏んで足を失くすという子どもも多いのですが、「地雷を踏まされた」子もいます。兵士が村から子どもを誘拐して、前線に連れて行って、地雷が埋められていると思われるところを、兵士の前を歩かせる、生きた地雷探知機として使うのです。

このように使われる子も「子ども兵」と言われますが、子ども兵は世界38カ国で30万人以上いると言われています。武器も小型・軽量化して、10才くらいの子でも抱えて歩けるくらいのもを作っています。

- ・ これらの武器は、どこで作られているのかというと、戦闘をしている国で作られることはほとんどなく、国連の常任理事国に入っているアメリカ、フランス、イギリス、中国やイタリアなどが作った武器が売られて、その武器で闘っているのです。要するに先進国で作られた武器で、貧しい国が闘っているという図式です。

自分たちが作った武器を売って闘わせて、それを国連軍という形で止めに入る、という訳のわからんことをしています。

イ、ホームレスの子どもたちとゴミ拾い

僕は今までに15カ国ほど回ってきましたが、カンボジアには、ホームレス、ストリートチルドレンの子どもたちが多くいます。特に首都プノンペンに行くと非常に多い。農村部、地雷の多い地域から来た子が多い。

農村部は地雷の影響と、ここ何年か雨が少

なく農作物が育たず、貧しさは広がっている。それで、食いぶちを減らすために農村から出されるが、コネがないと就職できず、この子らが仕事を得ることはまずない。

首都プノンペンの郊外に「ストウン・ミンチェイ」(希望の川)というゴミ捨て場がある。1960年代からずっと捨てられ続けられているので、本当にゴミの山で注射針からマンゴーの種まで何でも捨てられる。立ちこめる生ゴミの臭い、すさまじい羽音を立てて飛び回る何万匹ものハエ、自然発火して立ちこめる煙。ここでゴミあさりをし、金属とかプラスチック、ビニール製などのリサイクルできる材料を拾って、それで何とか食いつないでいる。こういう子どもたちは増え続けている。

ウ、人身売買(児童労働・売春)

- ・ タイとカンボジアの国境の橋の下で寝泊まりしている少年たち。その7割が人身売買の被害者だ。貧しい農村から子どもを買ってきて、荷物を背負ってタイとカンボジアの間を運ばせている。子ども1人70ドルの値段で売買されている。こういう子どもたちが月に500人~800人くらい出ている。朝7時から夜7時まで、国境を渡らず、山中を運ばせ、給料は無い。

- ・ 女の子は、売春させられる。売春している3~4割が人身売買によるというデータがある。一応、売春は禁止のはずであるが、ホテルの2階か1階の奥にはナンバーをふられた女の子がひな壇に座って指名を待っている。買いに来るのは、ヨーロッパ、中国、そして日本から来た人。

幼児売春も多く、10才前後の女の子。

9才の子もいた。「セックス・ツーリスト」で幼児買春に来る8割は日本人とNGOのスタッフに聞いた。日本人は、東南アジアの国の人々を見下しているように感じる。だから平然と買春ができるのではないか。

エ、HIV（エイズ）

カンボジアではHIVに感染する人が後を絶たない。国連が確認しているこの国の感染率は2.9%くらいだが、貧困層は病院に検査に行くことは少ないので、実質はその3～4倍はいると言われていて、アジア・太平洋地域で最悪だ。

しかも発病を抑える薬はあるが1ヵ月60ドルかかるので、貧困層の農民の何年分の年収にもあたるため、普通の人は飲めず、死を待つことになる。母親も感染し、先に親が亡くなり、HIVの子どもが残される。

(4) 戦争の後に何が残ったのか

残留地雷を取材していたら、貧しさが生まれてゆくことがわかり、貧しさからこれほどのものが間接的だけれどつながって生み出されてゆくんた、ということがどんどんわかってきました。

こういう戦争の後に何が残ったのかという取材をしてきて、今思うこと、感じていることは、戦争は起こしてしまうと止めるのも大変だし、二度と元には戻らない、ということです。

ところが、日本という国もそうですが、軍事力とか軍備にお金をかける国というのが増えていて、「正義の戦争」さえまかり通っている。そういう流れを非常に感じています。

(5) 次の世代の子どもたちに手渡すもの

イラクで今起きている事も他人事ではない。自衛隊がイラクに出てるというだけではなく、戦争は最大の環境破壊だということを知らないといけない。

イラクの空爆で巻き上がった砂が、3日後には日本に届くんです。劣化ウラン弾とか、新型ウラン爆弾とか、放射能が出るような兵器もどんどん開発され、使われています。だから、放射能とかいろんな物が一緒に日本に運ばれてきているということになります。だから、他人事ではないのです。今の石油の高騰なんかも無関係ではない。

それに、僕たちが住んでいる地球上での話ですから、関心を持たなければならないし、知らなければならないし、何とかしなければならない、と僕は思います。次の世代の子どもたちに、こんな戦争だらけの状況、環境破壊された地球を残していいのかと考えてしまうわけです。

それで僕は、僕が出来ることをやっている。たまたま僕は現場に行って、写真というものを使って伝える、ということをやっているだけで、1人1人出来ることってちがうと思います。1人1人が自分が出来ることをやっていかないともう手遅れになるのではないか。

憲法の話もそうです。9条を変えようという動きにしろ、今、国会でどんどん通っている法律も、国民のためにならないものが多いのではないか。そういうものも自分たちに関わってくる。もともと憲法というのは、国家権力を縛るためにあるのに、縛られる側が都合が悪いから変えちゃえ、というのはおかしいと思います。

最後まで聞いていただきありがとうございました。



憲法施行60周年記念市民集会PART II

「戦争の実態から、平和憲法について考える」

2008年

2/15

午後6時開場 **金**
6時30分開演

あいあいセンター

6階ホール

和歌山市小人町29番地
TEL 073(431)5246



入場無料



写真映像と講演

フォトジャーナリスト
こうりやま

そういちろう

郡山 総一郎氏

2004年4月、イラク取材中に拘束され、9日後に解放された。

イラク、アフガニスタン、パレスチナ、カンボジア、タイなど、世界の戦争・紛争地域で取材活動を続けている。



「戦争の後に 何が生まれ、何が残るのか」

和歌山弁護士会では、憲法施行60周年記念市民集会 Part II として郡山氏を迎えることにいたしました。現在世界で起こっている戦争を、リアルに知ることにより、平和憲法を持つ日本の責任、役割と憲法の平和主義について考える機会になればと考えています。

主催 / 和歌山弁護士会

連絡先 / 〒640-8144 和歌山市四番丁5番地
TEL 073(422)4580